

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02427

研究課題名(和文) 環境教育の基礎理論に関する教育学的研究

研究課題名(英文) pedagogical research of environmental education

研究代表者

今村 光章(imamura, mitsuyuki)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：10300120

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：環境教育の基礎理論についての教育学的研究を遂行することができた。黎明期の環境教育の成立史を正確に後付けし、環境教育という用語法の歴史をたどり直した。また、理念的環境教育と既存型環境教育という枠組みを設定し、理念型環境教育の教育的な意味での限界について検討することができた。既存型環境教育では、絵本のなかにも環境教育があることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

理念型環境教育が重要視されるなかで、既存型環境教育があることを指摘したことが学術的意義として最も大きい。意図的計画的な環境教育ではなく、無意図的で無計画的なものであっても、我々の生活のなかで、持続可能な社会を構築する教えと学びがあることを指摘したことが社会的意義である。

研究成果の概要(英文)：We were able to carry out pedagogical research on the basic theory of environmental education. We were able to accurately retrace the history of the establishment of environmental education in its early days and retrace the history of the terminology of environmental education. We were also able to set up a framework of ideological environmental education and existing-type environmental education, and examine the limitations of ideological environmental education in terms of pedagogy. In terms of existing-type environmental education, we showed that environmental education can be found in picture books.

研究分野：環境教育

キーワード：環境教育 教育学 環境倫理 絵本

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景には、日本型環境教育の源流としての自然保護教育と公害教育が、環境教育に対して有している意義の再確認がなされていないことがあった。加えて、昨今、日本では、E S D (Education for Sustainable Development) の10年が2014年にその期間を終了したが、どのような効果があって、どのような課題が残されているのかについても明確にされていなかった。このように、日本独自の環境教育学の学理論形成をすべき学術的背景があった。

また、研究課題の核心をなす学術的「問い」は二つであった。

まず、今後の環境教育学理論の発展の道筋を明らかにすることである。昨今、環境教育の発展に尽力し環境教育研究の中核をなしてきた中堅からベテランに至る研究者らが、「学」としての環境教育学の確立に貢献できる成果を一冊の本にまとめた。たとえば、日本環境教育学会が『環境教育辞典』(教育出版)を2013年に出版したり、環境教育の研究者、岩田好宏が『環境教育とは何か』(緑風出版)を2013年に出版したりした。ついで、日本環境教育学会の元会長の鈴木善次が『環境教育学原論』(東京大学出版会)を2014年に出版するなど、環境教育の「学理論形成」の機運がたかまりつつある。このような「学理論」形成に関する文献を丁寧に検討し、今後の環境教育学の基本的な発展の方向性を見通すことが研究開始当初の背景にあった。

## 2. 研究の目的

E S Dの10年の最後の年を迎え、環境教育が今後のどのような方向をもち、実践されるか、歴史的な転回点にあった。その時期に、学理論を整備し、これまでの日本の環境教育の動向をまとめることは、今後の環境教育の発展に大いに寄与する可能性がある。

本研究の独創的な点は、国際的な環境教育の学理論にも目配りしながら、日本型の環境教育の試みを包摂した環境教育学理論の形成を目指したことである。その背景には、環境教育とE S Dが環境問題の解決に十分な効果を挙げているとは言いがたい状況があった。つまり、理念先行で、現実の学校教育制度では実現できないような教育システムを構想したり、実行不可能な計画や環境問題改善の実効性が疑問視される環境教育計画を立案したりするからであった。そこで、きちんと学理論を形成し、環境教育とE S Dが本質的な意味で、持続可能な社会を構築する教育となるようにすることが目的であった。

現在、主流となっている環境教育からE S Dへの流れを加速させる理論的な研究として、本研究は他に類をみない学理論形成という学術的特色をもっていた。とりわけ、環境思想と教育思想を組み合わせた総合的統合的な研究として、これまでにない着想を有しているため、環境教育を推進するためにどうしても必要な研究であった。

### 3 . 研究の方法

まず、先行研究を概観した。環境教育学の確立に貢献できる成果である、日本環境教育学会の『環境教育辞典』(教育出版:2013年)、岩田好宏の『環境教育とは何か』(緑風出版:2013年)、鈴木善次の『環境教育学原論』(東京大学出版会:2014年)などを参考にしながら、環境教育の「学理論形成」の手がかりとなる文献と論文を検討した。

そのなかで、日本における環境教育の源流とされる自然保護教育、および、自然体験教育を総論的に振り返り、環境教育の支柱の一本となったこの分野の取り組みが環境教育学を確立していくうえで、どのような役割を果たしてきたのかを明らかにした。自然学校に関する研究成果も踏まえて、自然学校や市民社会において、環境教育学がどのように理解され広がるのかについても考察した。自然体験教育の文献としては、小川潔、西村仁志、降旗信一らの日本の野外教育の研究者らの論文や文献を研究した。

他方では、昨今、環境社会学と環境倫理学の立場から、環境教育をとらえ直す機会が開けていると言える。日本における自然保護教育の歴史的な検討を試みる一方では、環境社会学の見地から、教育学が現在から未来に向けて果たしていかなければならない役割について検討した。

### 4 . 研究成果

日本における環境教育の源流のひとつとされる公害教育研究の研究者として、公害教育の歴史的意義を振り返った。宮本憲一や藤岡貞彦、安藤聡彦らの研究を検討した。また、林美帆や高田研らの論考を踏まえて、現実的な公害教育がどのような課題を有しているのかについて明らかにした。公害教育の教育的意義についても言及し、環境教育学の構築に向けた示唆を得た。同時に、都市の環境問題について、今後どのようにアプローチするのかについて考察した。公害問題を踏まえ、都市化がすすむ社会のなかで、環境問題とは何なのかを環境倫理学の立場からとらえ直した。都市化する社会のなかで、環境倫理が環境教育学にどのようなインパクトをもちうるかを検証した。

副次的に、自然体験教育に関する研究の一部としての幼児期の自然体験教育に関する実証的な研究も行った。昨今では、地球環境問題を解決し、持続可能な社会を構築することは国際的な喫緊の課題である。そのためには、環境教育および「持続可能な開発のための教育」を幼児期(3-6歳)の環境教育、とりわけ、自然体験教育の実証的効果に関する実証主義的研究を実施し、幼児期の環境教育の重要性を確認した。

とりわけ、自然体験が幼児の体力に対する影響、自然物に関する知識に関する影響、自然を大切にしたいという気持ちに対する影響について、実証的に把握できた。さらに、卒園後の小学校1-3年生において、何らかの違いがあるかどうかについてもあきらかにできた。他方で、子どもと自然とのかかわり方についての教えと学びに関する教育人間学的研究を行う。文化化・都市化された人間生活のなかで、埋没して見えにくくはなっているが、理念型環境教育に先立つかたちで、脈々と受け継がれてきた「既存型環境教育」が存在することを示した。この「既存型環境教育」、すなわち、すでに人間の営みのなかにある「教えと学び」を再発見し再評価することで、環境教育、および「持続可能な開発のための教育」をさ

らに充実させる基盤的研究を行った。

思想研究では、海外の環境教育の研究者らの理論をまとめた。次いで、子どもと自然とのかかわり方についての教えと学びに関する教育人間学的研究を行った。文化化・都市化された人間生活のなかで、埋没して見えにくくはなっているが、理念型環境教育に先立つかたちで、脈々と受け継がれてきた「既存型環境教育」が存在した。この「既存型環境教育」、すなわち、すでに人間の営みのなかにある「教えと学び」を再発見し再評価することで、環境教育、および「持続可能な開発のための教育」をさらに充実させる基盤的研究を行った。

研究の成果は、書籍(単著)『環境教育学のために』(めるくまーる社、2023年3月刊行)においてまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 今村民子・今村光章	4. 巻 61
2. 論文標題 授業「幼児と言葉」に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大垣女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 今村光章	4. 発行年 2023年
2. 出版社 めるくまーる	5. 総ページ数 310
3. 書名 環境教育学のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------